



しんしん

ふ

むすひあはれ

思用
りりりりり
ねねねね
つづつづ
結後廿九候より廿二候までのり
五

んあ
るんあ
か
廿三
廿四

らんあ
ま
が
十九
廿六



詞瓊綸六之卷

むまび辞

紐鏡三轡四十三段。又そのなりあつと。とてむまび辞を此巻に
出せり。その中にあつたむまび辞ハ。そのむまび辞ハ。そのむまび辞ハ。

志

き

紐鏡一轡より五段まで

○あやふき志とよきとおつる言に三つのうらと有。一は紐鏡一轡右の
志。中。の。り。き。志。ハ。こ。こ。こ。二亦も亦二段右の志。中。の。り。き。志。ハ。こ。こ。こ。
三は亦三段右の志。中。の。り。き。志。ハ。こ。こ。こ。亦四段亦四段右の志。中。の。り。き。志。ハ。こ。こ。こ。
こ。こ。こ。三つの中。に。上。二。段。の。志。ハ。こ。こ。こ。下。三。段。の。志。ハ。こ。こ。こ。
ゆ。こ。こ。の。志。ハ。こ。こ。こ。後。の。志。ハ。こ。こ。こ。の。志。ハ。こ。こ。こ。の。志。ハ。こ。こ。こ。
の。志。ハ。こ。こ。こ。の。志。ハ。こ。こ。こ。の。志。ハ。こ。こ。こ。の。志。ハ。こ。こ。こ。の。志。ハ。こ。こ。こ。



右三

ほろぎきとてれとありにのむけにきりたまはららん

右八

とがしてよしのあまもつらきよとらむとらむとらむらん

右十六

わが身かゝるにの申とまがまつ人の一とまかあらん

いさゝかの上りつものいかり

わが身かゝるにの申

件のおどらんといひびし事な。若し事なればよはらば
ゆきを敷くことなほじ。いさゝかあつらふ海つ。好むとた
のいづれはくはら。いさゝかあつらふ海つ。好むとた
能ひあつらふ海つ。いさゝかあつらふ海つ。好むとた
を敷く。何とてたつらふ海つ。好むとた
たつらふ海つ。いさゝかあつらふ海つ。好むとた

いさゝかあつらふ海つ。いさゝかあつらふ海つ。好むとた

いさゝかあつらふ海つ。いさゝかあつらふ海つ。好むとた

いさゝかあつらふ海つ。いさゝかあつらふ海つ。好むとた

いさゝかあつらふ海つ。いさゝかあつらふ海つ。好むとた

いさゝかあつらふ海つ。いさゝかあつらふ海つ。好むとた

いさゝかあつらふ海つ。いさゝかあつらふ海つ。好むとた

いさゝかあつらふ海つ。いさゝかあつらふ海つ。好むとた

いさゝかあつらふ海つ。いさゝかあつらふ海つ。好むとた

いさゝかあつらふ海つ。いさゝかあつらふ海つ。好むとた

いさゝかあつらふ海つ。いさゝかあつらふ海つ。好むとた

いさゝかあつらふ海つ。いさゝかあつらふ海つ。好むとた

いさゝかあつらふ海つ。いさゝかあつらふ海つ。好むとた

凡二
康徳五年

後拾八

くまろくゆく年をばわぞわうじぬるそいよやまをあらん とまらん

十四

いひしめんあまごいせそやまのり川ふうきあがれとらん とまらん

後拾八

いせのう上よらわさひやまぐりまのの辞らう とまらん

拾八

中紙かくりひくのそま とまらん

凡九

あまのちまき二つまのり とまらん

後拾七

まろいおやねとどろろる とまらん

全二

昨日よりはよものこべ乃秋芳のねもかまふの とまらん

後拾八

いせのうの辞まう とまらん

後拾八

日れちハ とまらん

後拾七

らきぬありかまの川ぬ とまらん

十九

みやこ とまらん

後拾七

さのふらふき とまらん

後拾七

さう とまらん

後拾七

あま とまらん

後拾七

あま とまらん

後拾七

あま とまらん

〇らん

〇らん とまらん

後拾三

あま とまらん

きん

きん

中四十一段

〇らん

〇十一

○つゆはちんもあつておつてか

○おふさのちん 此格二つま。おふさかさよをまらよりつづきり

お 日蓮さま茶の事や。さうとほまもねまきのころうりおおえたら

おふさのちん
おふさのちん
おふさのちん

後 いろはへりいひねまされいとまき一若の丁もはねおあさ

おふさのちん
おふさのちん
おふさのちん

格十七 さぐり山みはけりみち染んあつて今一まび乃みゆまき

おふさのちん
おふさのちん
おふさのちん

お 十三 人しほぬまみひぢおまもまよひくはふちと杯を

おふさのちん
おふさのちん
おふさのちん

お 十二 おめりのちりきりやまうとくろくおまのまむりつとんといえ

おふさのちん
おふさのちん
おふさのちん

新葉 一日ふさへのおとまきんりまをぬりおゆべのま葉つま

おふさのちん
おふさのちん
おふさのちん

お 十二 むの免つくろまてあつていつたりにあまぬらうま人とあ

おふさのちん
おふさのちん
おふさのちん

石の格もまぶくろまておふさのちんにあらうり。さうまおあさ

のふあわりておあさ

お 十八 人あまごどたりあつてあまかまのちりおてあまおあま

おふさのちん
おふさのちん
おふさのちん

いまだかゝるんといふべき格も消れかゝるとなり。但し上より一とくはじつ

とて形かゝるんの上のからん。もと後のこと。そのや何れかの辞をた

く例を。後後七十七とふくはうきをきねぬらうきよとて後ぞかひ

かむかゝるん。いよいよ上はさかへて。本よりかゝるんといふべきはうは

かゝるん。いよいよ上はさかへて。本よりかゝるんといふべきはうは

かゝるん。いよいよ上はさかへて。本よりかゝるんといふべきはうは

かゝるん。いよいよ上はさかへて。本よりかゝるんといふべきはうは

かゝるん。いよいよ上はさかへて。本よりかゝるんといふべきはうは

かゝるん。いよいよ上はさかへて。本よりかゝるんといふべきはうは

かゝるん。いよいよ上はさかへて。本よりかゝるんといふべきはうは

かゝるん。いよいよ上はさかへて。本よりかゝるんといふべきはうは

かゝるん。いよいよ上はさかへて。本よりかゝるんといふべきはうは

かゝるん。いよいよ上はさかへて。本よりかゝるんといふべきはうは

かゝるん。いよいよ上はさかへて。本よりかゝるんといふべきはうは

かゝるん。いよいよ上はさかへて。本よりかゝるんといふべきはうは

かゝるん。いよいよ上はさかへて。本よりかゝるんといふべきはうは

かゝるん。いよいよ上はさかへて。本よりかゝるんといふべきはうは

かゝるん。いよいよ上はさかへて。本よりかゝるんといふべきはうは

かゝるん。いよいよ上はさかへて。本よりかゝるんといふべきはうは

かゝるん。いよいよ上はさかへて。本よりかゝるんといふべきはうは

かゝるん。いよいよ上はさかへて。本よりかゝるんといふべきはうは

かゝるん。いよいよ上はさかへて。本よりかゝるんといふべきはうは

かゝるん。いよいよ上はさかへて。本よりかゝるんといふべきはうは

かゝるん。いよいよ上はさかへて。本よりかゝるんといふべきはうは

かゝるん。いよいよ上はさかへて。本よりかゝるんといふべきはうは

右後折る。上ハ折ひ。下ハつ。のまん。右折る。上まづ。の折。下ハ折ひの

○そのまにまかるん

かゝるん。いよいよ上はさかへて。本よりかゝるんといふべきはうは

かゝるん。いよいよ上はさかへて。本よりかゝるんといふべきはうは

かゝるん。いよいよ上はさかへて。本よりかゝるんといふべきはうは

かゝるん。いよいよ上はさかへて。本よりかゝるんといふべきはうは

かゝるん。いよいよ上はさかへて。本よりかゝるんといふべきはうは

かゝるん。いよいよ上はさかへて。本よりかゝるんといふべきはうは

かゝるん。いよいよ上はさかへて。本よりかゝるんといふべきはうは

かゝるん。いよいよ上はさかへて。本よりかゝるんといふべきはうは

かゝるん。いよいよ上はさかへて。本よりかゝるんといふべきはうは

後拾一 思ひかくくまか〜 ま〜 ま〜 ま〜 ま〜 ま〜 ま〜 ま〜 ま〜 ま〜 ま〜

お 十太 思ふれどよわき〜 ま〜 ま〜 ま〜 ま〜 ま〜 ま〜 ま〜 ま〜 ま〜 ま〜

又上り〜 ま〜 ま〜 ま〜 ま〜 ま〜 ま〜 ま〜 ま〜 ま〜 ま〜

後拾二 思ふれどよわき〜 ま〜 ま〜 ま〜 ま〜 ま〜 ま〜 ま〜 ま〜 ま〜 ま〜

後拾三 思ふれどよわき〜 ま〜 ま〜 ま〜 ま〜 ま〜 ま〜 ま〜 ま〜 ま〜 ま〜

後拾四 思ふれどよわき〜 ま〜 ま〜 ま〜 ま〜 ま〜 ま〜 ま〜 ま〜 ま〜 ま〜

後拾五 思ふれどよわき〜 ま〜 ま〜 ま〜 ま〜 ま〜 ま〜 ま〜 ま〜 ま〜 ま〜

後拾六 思ふれどよわき〜 ま〜 ま〜 ま〜 ま〜 ま〜 ま〜 ま〜 ま〜 ま〜 ま〜

後拾七 思ふれどよわき〜 ま〜 ま〜 ま〜 ま〜 ま〜 ま〜 ま〜 ま〜 ま〜 ま〜

後拾八 思ふれどよわき〜 ま〜 ま〜 ま〜 ま〜 ま〜 ま〜 ま〜 ま〜 ま〜 ま〜

○下の廻へつぐま〜

保氏 かがな〜 ま〜 ま〜 ま〜 ま〜 ま〜 ま〜 ま〜 ま〜 ま〜 ま〜

千 十 なが〜 ま〜 ま〜 ま〜 ま〜 ま〜 ま〜 ま〜 ま〜 ま〜 ま〜

○ま〜 ま〜 ま〜 ま〜 ま〜 ま〜 ま〜 ま〜 ま〜 ま〜 ま〜

右 一 なが〜 ま〜 ま〜 ま〜 ま〜 ま〜 ま〜 ま〜 ま〜 ま〜 ま〜

右 一 なが〜 ま〜 ま〜 ま〜 ま〜 ま〜 ま〜 ま〜 ま〜 ま〜 ま〜

千 九 なが〜 ま〜 ま〜 ま〜 ま〜 ま〜 ま〜 ま〜 ま〜 ま〜 ま〜

新 八 なが〜 ま〜 ま〜 ま〜 ま〜 ま〜 ま〜 ま〜 ま〜 ま〜 ま〜

大 七 なが〜 ま〜 ま〜 ま〜 ま〜 ま〜 ま〜 ま〜 ま〜 ま〜 ま〜

○おはな

○十八

七 山里を秋をせむふらぐらと^二麻のちくゆふをさへ^一 ?

八 流波根乃高のりごとままどよ春^二まけみやるは法をあらひ^一 ?

九 川のさふちりそをゆん^二さうくむおりのげおのそをを^一 ?

十 夫の川急し流せぬをわたりあふ^二くま川に流す神をゆき^一 ?

十一 君をあらうしつみつるね^二あぬはくるとおまむし^一の心をまれ ?

十二 心のとぐひのつゝハ。事りにあそぎと。上へうを格あふあふ。中ふりも何ド

くもて。上の伴はつくとむらり ?

十三 芳根とまうりき ? けふは法実のこまに身をあらうね

十四 きの先 ? あまを事ゆらいつるににらぬを人きまうねん

十五 月夜はまぬ人きまうねん ? 月夜はまぬ人きまうねん ?

四 人しきぬくちまきうば ? もろきあどくおいそきう柳を

五 一光しに君が垣根の卯玉まうしと見 ? も程程む式

六 くるくはくさぐひのつゝハ。あまうつあふひてあゆされど上のつくと

別あふんをうけはゆ ? け中におのつゝかくあゆまがけらう。

七 さをけるがくふあひくゆあつゝハ下にもを流しまがあゆき ? ^{はて}

てとつひてまうき ? ^{はて} ? ^{はて} ? ^{はて}

八 下はあちをぬく先てつひ ? ?

九 喜がまうた ? やいご ? せ ? の ? せ ? せ ?

十 喜がまうた ? やいご ? せ ? の ? せ ? せ ?

十一 喜がまうた ? やいご ? せ ? の ? せ ? せ ?

十二 梅枝 ? き ? ぬ ? ころ ? ひ ? せ ? ま ? う ? け ? て ? め ? たい ? ま ? せ ? せ ? せ ?

きハふつて 朝と暮とをいふは けふとあしたと云ふは けふとあしたと云ふは

日 志がたをまきけしふかして 日うつむ 永夜子 亦君をゆり [?]

若ハふつて けふとあしたと云ふは けふとあしたと云ふは けふとあしたと云ふは

日 山ざらうわが 君ふらふらば ちの 庭みの ぬををよと云か [?]

まらうて 君せぬるよと云ふは

日 やぞりせし人乃か ころあぢをぬま けふとあしたと云ふは [?]

まふあふつて けふとあしたと云ふは けふとあしたと云ふは けふとあしたと云ふは

日 風物多ばあつり ぬらぬら ぬらぬら ぬらぬら ぬらぬら [?]

庭より けふとあしたと云ふは けふとあしたと云ふは けふとあしたと云ふは

日 けふとあしたと云ふは けふとあしたと云ふは けふとあしたと云ふは [?]

けふとあしたと云ふは けふとあしたと云ふは けふとあしたと云ふは

日 けふとあしたと云ふは けふとあしたと云ふは けふとあしたと云ふは [?]

けふとあしたと云ふは けふとあしたと云ふは けふとあしたと云ふは

日 けふとあしたと云ふは けふとあしたと云ふは けふとあしたと云ふは [?]

けふとあしたと云ふは けふとあしたと云ふは けふとあしたと云ふは

日 けふとあしたと云ふは けふとあしたと云ふは けふとあしたと云ふは [?]

けふとあしたと云ふは けふとあしたと云ふは けふとあしたと云ふは

日 けふとあしたと云ふは けふとあしたと云ふは けふとあしたと云ふは [?]

けふとあしたと云ふは けふとあしたと云ふは けふとあしたと云ふは

日 けふとあしたと云ふは けふとあしたと云ふは けふとあしたと云ふは [?]

むきぐさつて下へのさうしん

十四 古きやとハ思ふりのめくむぐししのゆゆふぶをたちまね [?]

まきぐさつて下へのさうしん

十五 秋の回結るる下への不結るる方成りつみを成りつとてハ思ふねさ [?]

秋の回結るる下への不結るる方成りつみを成りつとてハ思ふねさ

十六 妻のゆとりしつらさるるまぶさのあまよかのざりりくを人よあま [?]

妻のゆとりしつらさるるまぶさのあまよかのざりりくを人よあま

十七 人のあまつたけしあゆみのたけしんよよくあま [?]

十八 人のあまつたけしあゆみのたけしんよよくあま [?]

十九 人のあまつたけしあゆみのたけしんよよくあま [?]

二十 田子結るるにちち出てまねハ白妙のあしけさ松永をハぬり [?]

田子結るるにちち出てまねハ白妙のあしけさ松永をハぬり

加ふ

二十一 ね不しを加ふハ加といふ辞ふるを添へ物也。 [?]

二十二 ふうふといふべきを加ふといひいふとあり。 [?]

二十三 万葉ハかまといふ辞也。 [?]

二十四 けままといふ詞也。 [?]

玉結る

十三 まろより又あし人ともれあひをほせまへむのしつう
う

十六 羨とてそつべりきさよの申にうつろく物とありひき
う

十九 志が代りしつふ板心乃いろくあつらふとくろひき
う

こまへみけうのほろ人をひきまき。六帖よあふひあんをけりて。わび
さうまうてはてしなげう。いづれのももみまある。

二十 あつらひき縁まきとくうきうぐひをのり年のまろむあつれくに
う

二十五 けひえぬともれもあ身けうく長あひひきくはともくも
う

あまうらまきのあつまき。世のこくまき。

ぬき

十九 出てゆくむ人きさくせんうきまふありけ方にもむぬ
う

二十 二が門乃一むくむくたうまけんきがたるまのあゆもこぬ
う

六帖 赤き了せらあふくわろき長慶花うつきてとまうくぬ
う

こまへみけうのほろ人をひきまき。六帖よあふひあんをけりて。わび
さうまうてはてしなげう。いづれのももみまある。

かろ 濁附

○おふとそとくまきとほく時とまきく加を濁りて。おふとの辞とまき
おしげまきもかを濁りて。おふとまきく。かまハ苦濁りて。おふとまき。

かろ

七 かくしつろあまかくにもまきく。あまがハみ代よりよし
とくま

十 花の本おろくさくあまき。あまはあまきありあり。このまき。あま
とくま

十一 名あしおあまお板心乃さくまき。あまき。あまき。あまき
とくま

ふよかぎまゝとくまゝとて。その卯ハ例を。

新編撰十九いせの海ふき川ふ信と花あがとつとて妹があづとふせんこれ
と例をきむうとくし。けちハ万葉三ノ一在て。花よととらとらとを改先て入ま
らまゝとらと。云信とと万葉三ノ一加くけちととめて入とて誤り。而くハあり。又
保氏格娘の例よか。あまらとらとらと。けちハととをに写し誤らとらと。

○かろとかるとけちと

後抄 二 ちがきをえそ〜かろとかる〜いのちと〜とく〜と。かろとかるとけちと

淇園詩話

皆川先生著

文語解

大典禪師著

島原詩話

六如上人著
けちハけちとらと
可取とらと

皇都名勝詩集

小本一冊

續文變

大典禪師著

詠物百首

大田玩鷗先生著
けちハ詠物と
けちとらと

道得門卷

袁洲之書
全部三冊

日本歴史略

全四冊

春秋左氏傳考

明霞先生著
大典禪師校

全三冊

皇都書林

京洛幸以古池丸町

其書を孫とて板

